

マサヒロ・水野

野毛大道芸人
列伝

★41★

の人だから、とくれば普通は身投げである。ところが男の右手には一本の棒が握られ、その先からは糸が細く長く伸びて、地表すれすれのところで、玉が揺れている。

ジャグラーという言葉はわれわれの耳に疎いが、「西洋風複雑お手玉師」なら、ステイックや玉を空中で踊らせるあれ、と芸の察しは容易につく。しかし「お手玉師」を自称する三十男とくれば、話は別だ。

マサヒロ・水野はケン玉と

お手玉で生計を立てている。芸になるケン玉を初めて目にしたのは数年前の大道芸大会のこと。ビルの窓から男が半身を乗り出して、下が黒山

題が「大道芸と祝祭」とあっては、識者のパネリストだけでは物足りない、是非芸人さんの実演も、と話は膨らんだ。夢は大きく、しかしギヤラは学会値段で心もとない。恐る恐る、という感じで声を掛け、水野さんの「快活」で、安堵(あんど)の胸をなで下ろした。

そして、当日。実演が始まるときの礼儀正しさは、無用の長物である旨、簡潔に指摘してから、再びお手玉に取りかかった。



「西洋複雑お手玉師」ならではの鮮やかな手さばき

「七つ玉」の芸が出た。お手玉二個を操るのは比較的簡単だ。三個、四個、五個と増やして、さて今度は至難の七つ玉です、とくる。客席が静まり返ったところで、玉が静まり返ったところで、玉五つ抱えたまま、ぴょんぴょん跳んでみせる。五個プラス手持ちの二個で七個玉、というわけ。学者相手にこれをやった水野さんもエライが、大喜びの先生たちも心が広い。あの時の会場の一体感はいまだにかけがえない思い出だ。

(荻野アンナ)

転職9回を経て客を「手玉」に